

学校図書館関係者の思いに学ぶ (広島女学院中学高等学校編)

山 口 大 輔 (意 眞)

Learning from the Perspectives of School Library Personnel:
Hiroshima Jogakuin Junior and Senior High School Chapter

YAMAGUCHI Daisuke (Ishin)

要 旨

本稿は、シリーズ化を予定している「学校図書館関係者の思いに学ぶ」の1作目である¹。本稿では、他校（館）との安直な比較にさらされない形式にて、取材先を肯定的に紹介していく。そうすることで、本稿の目的（その館の自然体の魅力を言語化すること）を果たしていく。

今回は、広島女学院中学高等学校の司書教諭取材した。そこでは、館内リニューアルの話や、広島とは切り離せない原爆や平和教育の話などについてうかがうことができた。また、そうした話題の中で印象的だったのは、「実社会で通用する平和教育とは何か」「建学の精神を学校図書館においてどう表現していくか」といった問いと向き合う姿だった。もちろん、そうした自問自答は、属人的な単発の事象ではなく、これまでの当校や当館を支えてきた多くの教職員によって連綿と続けられてきたもののようである。少なくとも、それを感じさせる形跡が、校史や教材等に認められるのである。原爆によって生徒や教職員に多くの殉難者を出し、「語り継ぐべきもの」がある学校だからこそ、時代には左右されない教職員による熱い思いがバトンで繋がれていることを学んだ取材回となった。

キーワード：学校図書館、学校司書、原爆、平和教育、多様性

は じ め に

物事の見方には多くの視座が存在し、どの視座にも意義が存する。たとえば、学校図書館を批判的に見ることは、憂慮すべき学校図書館の課題点を世間に知らしめ、状況改善やさらなる悪化の予防に繋がる。中立的に見ることは、各館の自己点検やそれに基づく方針の決定等に役立つ。肯定的に見ることは、その館や関係者ら（職員・利用者・保護者など）の自己肯定感やモチベーションの向上に貢献する。

これらの中でも、筆者は最後に挙げた方法によって学校図書館の発展を願いたい。その主たる理由は、以下の三つである。

一つは、世間にはまだまだ自然体の学校図書館が紹介されていないと考えるからである。そこには、(図書館界の常識や時勢から見て)自館が無意識に犯している間違いを校外に発信してしまう不安があるのかもしれない。あるいは、誇れる実績がないからと、どこか遠慮がちになる部分があるのかもしれない。いずれにせよ、先進的な取り組みや数値で注目を集める学校図書館のみならず、情熱ある学校図書館関係者が在籍する学校図書館も、大いに世間に認知されるべきだと考えるのである。

二つは、各館同士の相互理解や労い合いを促進させ、かつ各館が自らのアイデンティティや魅力に気付ける雰囲気を作りたいからである。学校図書館は、良くも悪くも公共図書館よりガラパゴス進化しやすい。だからこそ、各館の独自性を世間が温かく容認し尊重していく雰囲気が必要だと考える。

三つは、学校図書館も「成長し続ける有機体」だからこそ、現時点ではたとえ不十分に思える自館の状況であったとしても、それを「成長途中」のものとして堂々と発信していけばよいと考えるからである。

では、どうすれば他校との安直な比較にさらされにくい形で、肯定的に各館を紹介でき、ひいては各館の自然体の魅力を言語化できるだろうか。これについて、筆者は「学校図書館関係者の思い」を軸に紹介すれば、それが叶うのではないかと考えた。よって、「学校図書館関係者の思いに学ぶ」と題した本シリーズを企画し、各館を巡りつつ、その自然体の魅力を発信しようとした。

ところで、ここでおさえておきたいことがある。それは、本シリーズには、取材校の募集広報活動に寄与する意図もなければ、筆者と取材校間に開示すべき利益相反もないということだ。大言壮語にはなってしまうが、取材校単体という小さなスケールの話ではなく、あくまで学校図書館界全体の発展に少しでも寄与できればとの思いからである。このことについて、ぜひご理解いただけるとありがたい。

さて、第一校目は、広島女学院中学高等学校から紹介する²。流れとしては、当校や当館についての概観、当校司書教諭へのインタビュー、そしてそこから浮かび上がってくる当館の魅力を紹介していく。

広島女学院中学高等学校について

当校は、広島市内にある私立の女子中学校女子高等学校である。140年近くの歴史を持ち、「キ

リスト教に基づく女子教育」が為されている。1886年、牧師であった砂本貞吉が創立した女子塾「広島女学会」、およびアメリカ人宣教師のN. B. ゲーンズが初代校長として「女性のための女性による女子教育」を本格化させた私立広島英和女学校に起源を持ち³、2024年度の在籍者数は中学校588名、高等学校602名である⁴。では次に、当校の司書教諭である抹香加緒理教諭（以下、抹香氏）へのインタビュー内容に基づきながら、当館を概観する（図1）。

広島女学院中学高等学校 学校図書館について

(1) 館内マップと各エリアの紹介

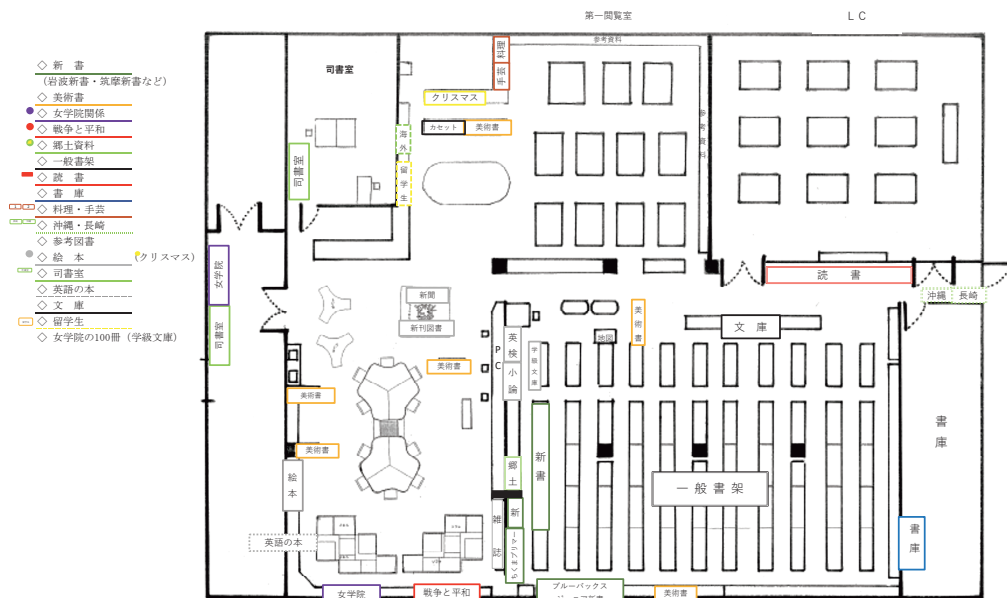


図1 館内マップ（左側が入り口）

館内に入ると（図2）、眼前にはリニューアルエリアが現れる（図3）。当館の「顔」をめざして作られたこのリニューアルエリア（図4・5を経て2021年に工事完了）については後述することにして、まずは入り口のすぐ右にある二つの鏡付き洗面台から見ていきたい。これらの洗面台は、感染症対策のみならず、当校初代校長による「Chest up!」という言葉に深く関係している。すなわち、「うつむくのではなく、胸を張り、顔を上げて、一人の女性として自信をもって歩いていこう」との精神を体現するため、常に自身の姿勢や表情を点検するための設備なのである。鏡に映ったその人自身が輝いて見えるようにとの思いから、人を映し出す鏡自体も額縁で装飾しているとのことだった（図6）。また、館全体の統一感を出すために、鏡だけでな

く、サインも額縁で装飾している(図7)。

もちろん、外見のみの自己点検に終始しないよう留意もされている。抹香氏の言葉では、「知的なものに囲まれることで、内面からも自身を見つめ直して欲しい。だからこそ、図書だけで



図2 館内から見た当館の入り口



図3 リニューアルエリア⁵



図4 リニューアル前の同エリア⁶



図5 リニューアル中の同エリア⁷



図6 額縁で装飾された洗面台の鏡



図7 額縁で装飾された NDC 区分表

なく、アンティークな図書館用品（絵画・古書・地球儀など）もくまなく配置した」とのことだった（図8～11）。また、昔から大事に使われてきたものを残したいとの思いもあって、今回のリニューアルでは、それらを現代的アイテムと融合させるデザインをめざしたとのことだった。

とはいえ、素人考えでは、アンティークなものと現代的デザインでは、その調和が難しいのではないかとも思ってしまう。しかし、意外なほどに違和感がないのである⁹（図12・13）。たとえば、図12のカードケースとデジタルサイネージの組み合わせを見てみよう。後者のカードケースの存在自体が当校の歴史を物語るが、色味や質感も現代の棚とうまく調和している。

またリニューアルに際しては、「本を美しく魅せること」「使う人が適度な距離感を保てること」「女子らしさ、女学院らしさを出すこと」が意識されたそうで、使いやすい空間となるようミリ単位での試行錯誤があったそうである¹⁰。

たとえば、ピラミッド型展示台は、立った状態で手に取りやすい高さ（65 cm）にしたと聞

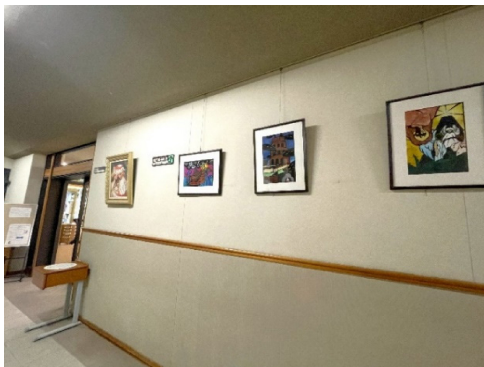


図8 入り口付近（館外側）の絵画群⁸



図9 洗面台左側にあるショーケース



図10 当館中央付近にある地球儀



図11 古い書見台（リニューアルエリア）



図12 リニューアルエリアにあるカードケースとデジタルサイネージ



図13 従来からある本棚（手前）と新たに設置した本棚（奥）



図14 リニューアルエリアにあるピラミッド型展示台



図15 立った状態で本に手をのびた様子

いた（図14・15）。一方で、「では、図12に見えるデジタルサイネージエリアの天井付近にある本は取りにくいのではないか」と疑問に思う人もいるかもしれない。ただ、ここにも抹香氏の思いがあった。つまり、前述した「知に囲まれた空間にしたいとの思い」によって作られた天井書架に、装丁は美しいものの、古さもあいまってそれまでは書架でひっそりとしていた本（『國譯漢文大成』や『有朋堂文庫』など）を置いたとのことだった。つまりは、その本を違った書架で違った見せ方にする事で、当館におけるその本の魅力を最大化したと解釈できるであろう。

ちなみに、このリニューアルエリアの改装費用は、当校の卒業生であり数学科教諭であった秦野壽和氏、同じく卒業生の向井淑子氏（秦野氏の妹）・秦野たゑ氏（秦野氏の母）による寄贈で賄われたそう¹¹（図16）。当校の教育活動に役立てて欲しいと、図書館の改装だけでなく、高校チャペルのパイプオルガンなども寄贈されたそうである。筆者自身の司書教諭時代にも経

験したことが¹²，こうした寄贈は，学校やその関係者（生徒・保護者・教職員・卒業生・地域住民等）に自己肯定感をもたしらしてくれるものと感じている。金額の多寡にかかわらず，自分たちに私財を投じてくれたという行為自体が率直に嬉しく感じられるのである。

さて，リニューアルエリアを背にして奥へ進むと，従前の一般書架が続く。間口方向・奥行き方向のどちらから見ても，低めの書架が手前に配置される形になっており，圧迫感や死角を抑えるセオリー¹³が意識されているように感じられた（図17～19）。これにより，抹香氏がこだわったというピクトグラム入りのサイン（図20）も死角には入っていないようであった（図19）。

一方，バリアフリーの観点から書架間隔をどう確保するかといった悩みはあるとのことだった。たしかに，歩く人と車椅子利用者がすれ違い，車椅子利用者が90°回転できる限度寸法は1,350 mmであり，その場で180°回転を行う場合は1,500 mmが望ましいとされている¹⁴。故に，現代図書館で最も採用の多い寸法体系は1,800 mmだが¹⁵，当校に限らず，この問題に頭を悩ます学校図書館も少なくはないのではないだろうか。

次に面白いのは，この従前エリアにある照明群である。従前エリアの照明は，天井からの吊り下げ型である（図17～20）。これは，「蛍光灯はLEDに比べて減光率が高く，その寿命も短い



図16 リニューアルエリアに貼られた寄贈銘板



図17 図書館入り口から奥方向に見た棚の並び



図18 図書館中央通路から右側方向に見た棚の並び

こと」への機能的対処であることが多い。つまり、照射効率や電球取り替えの容易さから、当校のように吊り下げ型も多く採用されていたのである。そうした中で、この従前エリアの吊り下げ型の蛍光灯照明は、一時、天井埋め込み型 LED 照明への変更案が出たそうだが、しかし、リニューアルエリアの照明が吊り下げ型を採用したため（図12）、統一感を出すべく、（吊り下げコードの長さを短くし、ダウンライトを埋め込んだのみで）既存設備を残すことになったという。こうした機能的対処からと思われるデザインが、現代のデザインの流行と一致した点が面白く感じられた部分であった。

そして、従前エリアの左側（入り口から見て左奥）には、探究学習用のラーニングcommonsが新設された（図21・22）。こう言及すると、「一週間のうち何コマが授業で埋まるのか」といった数値に興味を湧くが、冒頭でも述べたとおり、安直な比較がされることは本シリーズの望むところではないため割愛したい¹⁶。

いずれにせよ、「授業利用による図書館の日常化により、これまで図書館とは縁遠かった生徒たちが、教室に帰るついでに本を借りていったり、展示の本を手取るようになったりしたこ



図19 入り口付近から見た棚の並び



図20 ピクトグラム入りのサイン



図21 入り口側から見たラーニングcommons



図22 ラーニングcommons内部



図23 ラーニングcommons床の埋め込み型タップ



図24 ラーニングcommonsの後付け型OAフロアと入り口のスロープ

とが嬉しい」と、抹香氏は言う。

構造としては、電源や配線を床下に格納するスペースを確保すべく（図23）、また打ちっぱなしコンクリートによる冷気を緩和する目的も兼ねて、総合的判断から「後付け型OAフロア」としたそうだ。書架・閲覧エリアより5cmほど床面が高くなっているため、入り口にはスロープが設けられている（図24）。また、書架・閲覧エリアへの騒音を防止するために四方は壁で区切られている。ただし四面のうち、（書架・閲覧スペースに面する）二面は、死角にならぬようガラス張りとなっている（図21・22）。

以上で、当館内部の概観が終わった。次は、当館司書教諭の抹香氏へのインタビューから、当館の精神性に迫っていきいたい¹⁷。

司書教諭へのインタビュー

筆者 本日はお忙しいところ、ありがとうございます。さて以前に、教員歴30年とうかがいました。先生にとって、この30年間は、教員あるいは社会人としてどのようなものでしたか。

抹香氏 はい。ご縁をいただき、当校の司書教諭となる前は、OLとして働いていました。OLは楽しかったのですが、私は本校（中高）の卒業生でしたので、学校への恩返しのつもりで働き始めました。とはいえ、ここまで長く続けられるとは思っていませんでした。妊娠した時も「もう退職しようかな」との思いが芽生えたのですが、先輩教員から「女子校だから女子たちのキャリアモデル、妊娠して出産しても働く女性の姿を見せる。無理はしちゃだめだけど、頑張る姿や、頑張れない時はありのままの姿を見せ

る。そうした姿を見せることだけでも、あなたの存在価値はあるのよ」と言っていた
だき、励まされました。辛い時期もあり何度も辞めようと思いましたが、女子校だっ
たからこそ、温かく見守ってもらいながら、ここまで働けたのではないかと感じてい
ます。とても感謝しています。

筆者 ありがとうございます。また、先生は30年間にわたって、司書教諭に専念させてもら
えたとうかがいました。兼任・兼務型の司書教諭が多い中で、元司書教諭の私とし
ましても、この点はとても羨ましく感じました。もし差し支えなければ、当校司書教
諭としての軌跡を教えていただけないでしょうか。30年間でいくつかのパートに分け
て、それぞれがどのようなものであったかといった形で結構です。たとえば、最初
の3年間は知識を蓄えたり滞りなくこなすことで精一杯だったが、次の10年間で少し
自分の色が出せるようになり、また次の10年では……。このような形ですといかが
でしょうか。

抹香氏 考えたこともなかったですね。以前は、中学校と高校のそれぞれに図書館が別々にあ
り、それぞれに担当の先生が1名ずついらっしゃいました。現在の中学校舎ができた
時（1990年）に、その二つの図書館が一つになりました。そうした時に、高校担当の
先生が定年退職されるということで、私が司書教諭として配置されました。10年あ
まり、中学校の司書教諭の先生とともに働かせていただきました。たくさんのことを教
えていただき、支えていただき、一つの図書館を一緒に運営できたというのはありが
たかったです。なぜなら、このお仕事というのは、知識の積み重ねによって、この図
書館にある資料のことはもちろん、それ以外にも、たとえば学校史や同窓生の知識や
情報を蓄積していくことで、初めて「繋がっていくもの」があると思うからです。つ
まり、検索機では出会えない人や情報を繋げていけることが、長く勤めたからこそ
の強みだと思うのです。そういう意味で、先輩司書教諭から教わった知識や情報が、後
半の私の業務に大いに活かされたと感じるのです。

筆者 なるほど。では大きく分けると、前半三分の一と後半三分の二といった形でしょうか。
では、後半部分の詳細は後ほどいかががうことにして、そうした歲月の中で感じる司書
教諭のやりがいについて教えてください。

抹香氏 いくつもありますが、たとえば、図書館こそを居場所としてくれる生徒に対して、（彼



図25 中学図書委員会の様子

女らが）安心できる環境を提供できるところです。人数としては、年間に数人ずつですが、彼女たちとコミュニケーションをとり、見守れることは大変嬉しいことです。次に、図書委員の成長も見守れるということです（図25）。図書委員に立候補する生徒の中には、「司書や司書教諭の業務は、好きな本を読むことだけなのではないか。そうであれば、自分にも合っているかもしれない」といったイメージを持っているケースが多くあります。しかし、実際の委員会活動を行っていると、利用生徒とのコミュニケーションが頻繁にあったり、蔵書点検や排架等で力仕事に出くわしたりします。そこで、司書や司書教諭に対する職業観が育成されるわけですが、そうした生徒たちの一連の成長や、（委員会活動という）教育効果が感じられる点にもやりがいを覚えています。また何より、自身が紹介した本を彼女たちが心の大事な部分に残してくれること、またそうしたエピソードを聞いたたびに、やっていて良かったなと感じます。違う側面から言えば、総合探究の延長線上として学校の歴史を発掘できる点も魅力です。先生方からのレファレンス質問を重ねるうちに、自然と知識がついていきます。そうすると、新たな疑問や気づきが生まれて、さらに調査をしたいとの欲求が生じます。

筆者 なるほど、「第二の保健室」としての役割、委員会活動における生徒の成長や教育効果への実感、生徒たちの人生と本を繋ぐ架け橋になれること、学校の歴史に関わり伝えていくことなどが、先生の30年間で支えてきたのですね。ちなみに、最後に挙げられた学校に関する歴史調査では、何か思い出深いものはありましたか。

抹香氏 はい、「本校生徒らによる絵が、イギリスのマンチェスター市から約60年ぶりに里帰り

した」というニュースに関する調査に携わりました。これは、複数の新聞社¹⁸が絵の返還について報じてくれました。本学の院長だった故・松本卓夫氏が、終戦時に平和・文化交流を目的とし、1950年代当時の本校生徒が描いた水彩画20点を中心に、マンチェスター市の教育家に渡したそうです。その水彩画たちが、60年の歳月を経て2016年に本校へ返還されたのです（図26）。この調査において、私は水彩画を描いた生徒を同定していく作業、そしてその生徒への返還作業を担当しました。水彩画の裏には、当時の在校生の名前が書かれていたので、それらの名前と当時の同窓会名簿を照合し、持ち主を特定していったのです。外国の方なので無理もないのですが、先方からいただいた名前リストには間違いのあるものも少々含まれていました。また、名前やその他の情報から作者と思われる方（生徒）に絵の写真を郵送しても、「遠い昔のことで記憶がない」との返答がほとんどでした。しかし、それでも裏に書いてあるお名前や手がかりになる資料をもう一度お送りしたり、お友達と一緒に見ていただいたりすると「あんたの絵じゃないん」という形で戻っていったものもあります（図27）。

また、（作者である）ご本人は既に亡くなられていても、そのご家族が「家族の遺品が見つかった」ということで、大変喜ばれる姿にも立ち会うことができました。

そして各社からの新聞報道後、これらの記事を見た清永修全氏（東亜大学芸術学部教授）から連絡があり、何度かやりとりをしました。最終的には、戦後広島における児童画による文化外交の歴史について一石を投じるものとして、“Das Erbe der Kinder - The Children's Heritage”という共著に寄稿されました¹⁹。私は、その224頁註1にて名前を挙げていただくことになりました。

筆者 なるほど、先生のそうした地道な照合作業があって、この新聞記事のような結末があったのですね。今、原爆にまつわるお話が出ました。貴館は、原爆や平和教育に対して、どのような関わり方をされていますか。

抹香氏 以前の本校における平和教育では、教員が意図したわけではありませんが、ヒロシマという土地柄もあり、生徒の意見には一面的なものが多かったように思います。一方で、本校の生徒が大学進学や就職で県外や国外に出たとき、核に関する多様な価値観と出会うことになります。たとえば、戦争を終わらせるためにはアメリカの原爆投下は正しい選択であったと考える方、世界から核はなくなると考える方、「核の傘」に必要性を感じる方、国防のためには日本も核武装すべきだと考える方、核兵器はなくすべきだが原子力発電は必要だと考える方、本当に多様な価値観と遭遇します。本校のある教員

60年ぶり 中高生の絵里帰り

被爆からの復興期に広島女学院（広島市中区）の中・高生らが描いた風景画など絵20枚が、英国・マンチェスター市から約60年の歳月を経て里帰りした。「平和な日常」を題材にしたものが大半で、うち1枚は卒業生の臨床心理士、倉永恭子さん（77）＝広島市東区＝の作品と分かり、引き取られた。残りの作品は3日の同校の中・高校合同文化祭で一部を展示した後、広島女学院歴史資料館（広島市東区）などで保存する。

広島女学院

英から、「平和な日常」描く20枚

広島女学院は、爆心地近くであり、原爆投下で生徒と教職員ら約350人が被爆死した。里帰りの絵は復興期の昭和20年代後半ごろに描かれたとみられる。原爆ドームを描いた1点以外、被爆の惨憺をうかがわせるものはなく、花瓶に生けられたユリやタリヤといった花、島や海岸を描写したもので、平和な日常の情景が中心だった。これらの絵は、全国の児童らが描いた絵と合わせ計約60枚が、戦後に海外との平和・文化交流を進めた当時の広島女学院院長、故・松本卓夫さんからマンチェスター市の教育家に渡されたとみられる。

絵は長年、大切に保存され、教育家が亡くなる前、詳しい経緯は語られることなく、マンチェスター市の元美術教師、マイク・ステイブソンさん（72）に一式が託された。そして、英国・ロンドンで絵画展を開催した後、ステイブソンさんから「被爆地の子供たちが復興

期に『日常生活』を切り取って描いたことに、平和を訴える力強さを感じる。私は管理しているだけなので、ぜひ広島に返したい」と申し出があり、今年7月

下旬に広島、マンチェスター両市を介して里帰りが実現した。広島女学院が、作品を描いたとみられる20人のうち、存命と分かった11人に確認したところ、うち1枚は倉永さんが世界平和記念聖堂（中区）を描いたものと判明。広島女学院中学校

で絵の返却セレモニーが行われ、星野晴夫校長から倉永さんに絵が手渡された。倉永さんは「どういうテーマで描いたかは覚えていないが、60年間も大切にしていたが、心から感謝します。絵は家に飾ります」と話していた。



60年ぶりに里帰りした絵。その中の自作の絵を掲げる倉永さんと星野校長＝広島市中区の広島女学院

からは、「被害者側からの見方しか教えられてこなかった生徒が、そうした多様な価値観と出くわしたときにショックを受けてしまい、ディスカッションすることさえできなくなるケースがある。世の中には多様な立場と価値観が混在していることもあわせて教えることが、平和を伝えていく役目を持つ本校の生徒にとって、広島の人間にとって重要なのではないか」といった声があがりました。そこで、学院全体でそれまで行われていた人権教育や平和教育をより体系立てて一本化した「Peace Studies」(巻末資料)というカリキュラムを起こしました²⁰。これと連動する形で当館も、原爆や核に関する意見の多様性に気づけるような図書を意識的に増やしてきました(図28)。

筆者 深いお話ですね。と同時に、先生方が生徒たちを日頃からよく洞察されており、将来も見据えた生徒の人格形成を真剣に考えられていることが伝わってきました。また先生方が、平和教育の在り方を常に考えられていることにも敬服しました。

抹香氏 そうなのです。これは広島で戦前から存在する本校の伝統であり、すばらしい点です。他にも、教職員組合による被爆体験集『夏雲』も本校の財産です。『夏雲』は、1973年に創刊され、改訂を重ねながら、今も教材として使用されています。『夏雲』をもとに英訳された“Summer Cloud: A-bomb Experience of A Girls' School in Hiroshima”(三友社、1973)もあります(図29)。本校は生徒と教職員ら約350人が被爆死しましたので(図26)、同窓会編集による証言集やその英訳版もあります(図30)。

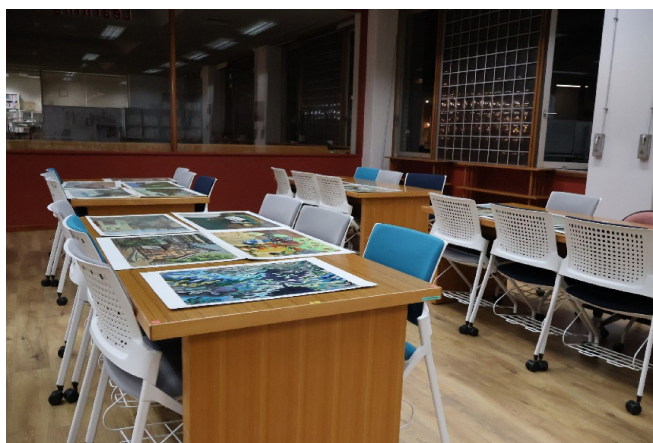


図27 今も当館に残る作者未詳の作品群



図28 核への多角的な把握ができるよう意識された選書の一例



図29 『夏雲』と“Summer Cloud: A-bomb Experience of A Girls' School in Hiroshima”



図30 『平和を祈る人たちに』と“For those who pray for peace”

筆者 これらの被爆証言集をはじめ、原爆関連の資料は、どこに排架されているのでしょうか。

抹香氏 主に、リニューアルコーナーのデジタルサイネージの脇に排架しています。ここに排架することには、さまざまな意見がありました。もともと、リニューアルコーナーは、当館に親しみをもってもらい、入りやすい雰囲気をめざして設置されたわけですが、「この最も目立つ玄関部分に、悲惨な内容の本、暗然たる背表紙タイトルの本を置くべきなのか」といった意見もありました。最終的には、本校の特色ある教育の一つとして来館者の皆さんに見てもらえるよう、この場所に決まりました。

筆者 なるほど。ちなみに、奥にある「沖縄・長崎」のコーナーも平和教育関連のもので

しょうか。

抹香氏 そうですね。本学では、中高六年間の平和教育プログラムを展開しています。中一では被爆について学び、中三では長崎へ研修旅行に、高二では沖縄へ修学旅行に行きます。その参考資料として「沖縄・長崎」のコーナーを設けています。

筆者 ちなみに、原爆関連のすぐ横には、同一タイトルの多言語翻訳版を集めたコーナーがあったかと思います。これについては、「言語は違えど、イメージするものは同じ。あるいは、イメージの共有化をより精緻なものとするには、まずは相手の言語を知ってみよう」などの思いが込められているのでしょうか。

抹香氏 これはある大学図書館を見学させてもらった際に、「言語別に排架するのではなく、主題に基づいた排架をしています」といった説明を受け、当館でも部分的に採用したものです。

筆者 そうでしたか、校外から学ぶ姿勢を持ち続けることは大変ですが、実に大切なことですよね。では、最後に、「司書教諭のたまご」である司書教諭課程生に何かアドバイスをいただけますか。

抹香氏 常に、好奇心を持ってほしいと思います。深くなくてもよいので、アンテナを広く張り続けていて欲しいと願います。司書教諭という仕事は、情報収集が好きな人にとってはとても良い職業だと思います。もちろん、日々の講義でも言及されているかもしれませんが、「自分以外に司書教諭が校内におらず、相談や質問ができない。そして、それ故に図書館を理解してもらえない」といった場合も時にはあるかもしれません。だからこそ他校と情報交換をし、「元気」を貰って、一緒に学校図書館を良くしていく。そうした心持ちが大切だと思います。

筆者 なるほど。環境のせいにして不満を口にしているだけではなく、その状況をどうしたら打破できるかを考えていくポジティブさや行動力が重要ということですね。また、生涯をかけて学習し続けること、好奇心を持ち続けることの大切さや必要性についても素敵なアドバイスをいただきました。このたびは、長時間に及ぶインタビューにご協力いただき、本当にありがとうございました。また、取材に際して、さまざまな方

へのお取り次ぎもいただき、誠にありがとうございました。

抹香氏 いえいえ、こちらこそ感謝しています。日頃から誰に伝えることもなく心に秘めていた思いを拾い上げてくださり、世間に発信していただけることをありがたく思います。

筆者 本シリーズの趣旨に賛同いただいたばかりか、そのようなお言葉までいただいたことに感謝します。今後も、学校図書館関係者の思いや各学校図書館の個性を世間に発信していきたいと思います。そうすることで、今悩んでおられる司書教諭、あるいは情報を知りたがっている司書課程生の役に立ち、また社会や学校における学校図書館への理解や支援の醸成に繋がればと思います。改めて、本日はありがとうございました。

お わ り に

広島女学院同窓会『広島女学院同窓会百年誌 広島女学院と共に百年』（広島女学院同窓会、1986）には、さまざまな世代の同窓生らによる当学院への思い出が多く語られている。そして、その中には当時の図書室、およびそこで出会った本や人などへの思い出が散見される²¹。同様に、現在の生徒たちにも、当館が「彼女たちの学校生活の一部」として語り継がれていくことを、図書館研究者そして元司書教諭の一人として願っている。

また、『夏雲』（改訂第8版）には、広島女学院における詳細な被爆状況とともに、生徒331名と教職員20名の計351名²²の殉難者の名簿が掲載されている（63～66頁）。そして、あとがきには編集者である広島女学院教職員組合平和教育委員会が、

かつて「広島にある高校として、何か特別に平和教育カリキュラムがあるか」と問われた時に、原爆により多くの生徒が犠牲となった本校に、原爆体験を継承し、平和をめざす生徒を育成していく教育活動が十分でなかった、という話を聞いた。・・・略・・・われわれはこのような身近かな（原文ママ）、否、今こうして毎日の学校生活が何気なく行なわれているこの足もとで、かつて繰り返された惨状を、少しでも再現し、教材化することにより、現在の教育の中に明確に位置づけることが必要だと思う。・・・略・・・この教材の編集は女学院における平和教育の出発点の一つであり、これからの実践が大切であることは言うまでもない　・・・略・・・

と結んでいる（下線および原文ママは筆者による）。これを見るにつけ、「当校の先輩教職員た

ちが、使命感と内省によって被爆体験の継承に努め、平和教育の在り方に向きあっていたこと」が分かる。

また、前掲書の謝辞には、学校図書館職員と思われる人物の名も挙げられており²³、1973年当時も、当館が積極的に学校（当校）に関わっていたことが読み取れる。

このように、ヒロシマが語り継ぐべきものを、時には苦悩しながらも学校全体で真摯に向き合い継承してきたからこそ、現在の当校や当館があるのだろう。今回は、学校全体で（自校の）文化や歴史を形成していく過程と、その過程に様々な形で寄与する学校図書館の姿に出会えた取材回であった。

参 考 文 献

- ▶ 広島女学院130年史編集委員会編『広島女学院130年史：1886-2016』、広島女学院130年史刊行委員会、2021
- ▶ 広島女学院百年史編集委員会編『広島女学院百年史』、広島女学院、1991
- ▶ 広島女学院大学創立100周年事業行事委員会砂本先生レリーフ委員会編『創立者 砂本貞吉先生 ～レリーフ除幕を記念して～』、広島女学院、1986
- ▶ 広島女学院教職員組合平和教育委員会編『夏雲：広島女学院原爆被災誌 改訂第8版』、広島女学院教職員組合、1999
- ▶ 広島女学院教職員組合平和教育委員会編『夏雲：広島女学院原爆被災誌 初版』、広島女学院教職員組合、1973
- ▶ English Department of Hiroshima Jogakuin High School (Ed.), "Summer Cloud: A-bomb Experience of A Girls' School in Hiroshima," SAN-YU-SHA, 1973
- ▶ 広島女学院同窓会被爆60周年記念証言集編集委員会『平和を祈る人たちへ：広島女学院同窓会被爆六十年証言集』、広島女学院同窓会、2005
- ▶ Editing Committee of Memoirs of the A-Bomb 60th Anniversary (Ed.), Mika Sogawa (Trans.), "For those who pray for peace," Hiroshima Jogakuin Alumni Association, 2005
- ▶ 広島女学院同窓会『広島女学院同窓会百年誌 広島女学院と共に百年』、広島女学院同窓会、1986
- ▶ 中井孝幸・川島宏・柳瀬寛夫『JLA 図書館情報学シリーズⅢ 12 図書館施設論』、JLA、2020

注

- ¹ 学校図書館には、司書教諭や学校司書以外にも、係り教諭・学校図書館ボランティア・図書委員会顧問・図書館主任・学校管理者・教育委員会などが関係する。（大串夏身監修、渡邊重夫著『学校経営と学校図書館』、青弓社、2015）こうした方への取材も想定しているため、本シリーズ名は、司書教諭や学校司書に限定しない表現とした。
- ² 1校目は、筆者が所属する広島女学院大学と関わりの深い当校からとなった。これは、もちろん、筆者が転居先の広島で知り合った初めての学校図書館関係者が抹香氏だったためである。
- ³ 1887年、女子塾「広島女学会」は「私立広島英和女学校」に校名を改称しているが、「広島女学会」が開かれたとされる10月1日が当校の創立記念日となっている。広島女学院大学創立100周年事業行事委員会砂

- 本先生レリーフ委員会編『創立者 砂本貞吉先生 ～レリーフ除幕を記念して～』（広島女学院, 1986）4・5頁, および「広島女学院のあゆみ」（『2025年度版 広島女学院中学高等学校パンフレット』）8頁など。
- ⁴ 当校 HP「地域別在籍数」（<https://www.hjs.ed.jp/exam> 2024年10月18日最終アクセス）
- ⁵ 当校 HP「施設紹介」より転載。（<https://www.hjs.ed.jp/facility>）2024/11/27最終アクセス。こうした注記がない限り、他の掲載写真は筆者の撮影による。
- ⁶ 当校 HP「図書館の紹介」（2017年6月3日記事）より転載。
（<https://www.hjs.ed.jp/info/%E5%9B%B3%E6%9B%B8%E9%A4%A8%E3%81%AE%E7%B4%B9%E4%BB%8B,>
2017.6.3）2024/10/18最終アクセス
- ⁷ 当校 HP「図書館リニューアル工事中」（2021年2月9日記事）より転載。（<https://www.hjs.ed.jp/info/%E5%9B%B3%E6%9B%B8%E9%A4%A8%E3%83%AA%E3%83%8B%E3%83%A5%E3%83%BC%E3%82%A2%E3%83%AB%E5%B7%A5%E4%BA%8B%E4%B8%AD>）2024/10/18最終アクセス
- ⁸ 入り口付近（館外）のみならず、館内にもジャン＝フランソワ・ミレー《落ち穂拾い》の複製画などがある。旧約聖書ルツ記のシーンをもとに創作したものであり、キリスト教主義教育を土台とする当校の精神を感じるものである。
- ⁹ 図5の中央に見える柱も、（図3のように）机の中央におさめるなどして、違和感なくまとめられている。
- ¹⁰ 当校 HP「卒業生紹介」 図書館リニューアルに関わってくださった松山育子さん」（2022年2月18日記事）
（<https://www.hjs.ed.jp/info/%E5%8D%92%E6%A5%AD%E7%94%9F%E7%B4%B9%E4%BB%8B%E2%99%AA%E3%80%80%E5%9B%B3%E6%9B%B8%E9%A4%A8%E3%83%AA%E3%83%8B%E3%83%A5%E3%83%BC%E3%82%A2%E3%83%AB%E3%81%AB%E9%96%A2%E3%82%8F%E3%81%A3%E3%81%A6%E3%81%8F>）2024/11/19最終アクセス
- ¹¹ ただし、秦野たゑ氏のみ“女学校”時代の卒業生。
- ¹² 拙稿「学校への寄付金から個人文庫を創設するまでの実際」（日本学校図書館学会編『学校図書館学研究』20, 81-93, 2018年3月）
- ¹³ 中井孝幸・川島宏・柳瀬寛夫『JLA 図書館情報学シリーズⅢ 12 図書館施設論』（JLA, 2020）, 135頁
- ¹⁴ 前掲書90頁
- ¹⁵ 前掲書90・91頁
- ¹⁶ もちろん、司書教諭が思いを語る上で触れた数値データ等については、無理にこれを隠すものでもない。
- ¹⁷ インタビューは、2023年9月1日から複数回にわたって、筆者が当館にお邪魔する形で実施した。
- ¹⁸ 朝日新聞（2015年8月7日朝刊）、産経新聞（2016年11月3日朝刊）、中国新聞（2016年11月10日朝刊）、朝日新聞（2016年11月16日朝刊）等。
- ¹⁹ Das Erbe der Kinder - The Children's Heritage: Provenienzforschung und Sammlungsgeschichte von Kinder- und Jugendzeichnungen. Museen, Archive, private Kollektionen und “verschwundene Sammlungen” (The Children's Heritage Provenance Research and History of Children's and Youth Drawings Collections. Museum, archives, private holdings and “lost collections”), hrsg. v. Jutta Ströter-Bender, Baden-Baden, Tectum Verlag (2021)
- ²⁰ 文科省が、2014年度からスーパーグローバルハイスクールに指定した56校への事後評価において、「事業目的は十分に実現された」と認定した7校のうちの1校に選出されている。文科省 HP「スーパーグローバルハイスクール（SGH）の平成26（2014）年度指定校の事後評価を踏まえた座長所見」（chrome-extension://efaidnbnmnibpcajpcglclefindmkaj/https://www.mext.go.jp/content/20200302-mxt_koukou02-000005112-02.pdf）2024/10/28最終アクセス。
- ²¹ 前掲書155, 183, 185, 187, 189, 293頁等。
- ²² 『夏雲』の初版本には、計330名（生徒310名、教職員20名）の殉難者名簿が掲載されている（47～50頁）。広島女学院百年史編集委員会『広島女学院百年史』（広島女学院, 1991）では352名とし、また「その中には被爆後一年以上経って死亡した者の数は含まれていない」との補足もされている（246頁）。
- ²³ 『夏雲』のあとがきには、「編集に協力して下さった、・・・略・・・図書館の山口さん・・・略・・・に心からお礼を申し上げたい」とある。

「ヒロシマ」を継承・発信し、世界の平和構築に貢献するリーダーとなる生徒を育成。リーダーに必要な「3つの力」、平和創・対話力・リーダーシップを養うカリキュラム“Peace Studies”を実行

価値観の違う他者と、コミュニケーションをとる力。考え方の違う相手を認め、コミュニケーションを通じて相手の考えを理解し、自分の考えを発信することができるグローバル・リーダーを育成する。

を学生の入学の時期に、「Peace Studies」を導入しよう。学生にとり「 Peace Studies」とは単なる学問ではなく、海外から平和に貢献できる人材を育成する場となる。学生と教員が共に学ぶ機会を設け、互いに学びあうことで、平和な世界をつくることに力を尽くす。授業内容は、国際法、外交政策、紛争解決、人道援助、環境問題など多岐にわたる。また、海外からのゲストスピーカーや研究者を招き、学生と対話する機会を設ける。さらに、海外でのフィールドワークやボランティア活動も行う。このようにして、学生が平和な世界をつくるための知識とスキルを身につけ、社会で活躍できるように育てよう。

以上が、本学の「Peace Studies」導入の概要である。この計画を実行するためには、教員の研修や教材の開発が必要となる。また、学生の理解を得ることも重要である。しかし、これらの課題は乗り越えられる。我々が目指しているのは、平和な未来のためであり、それは必ず達成されることである。

学年	Peace Studies の学習内容			
中1	<p>ヒロシマ、広島女子学院の植樹</p> <p>「真実」や「愛」を通して、被害者や被害者の気持ちを理解し、植樹活動の意義を学ぶ。植民地主義の非人道的性について考える。</p>	<p>平和記念資料館見学：平和学習のためのフィールドワーク</p> <p>被害者の声や生の証を聞く</p>	<p>国内外の植民地・外部との連携</p>	<p>三つの力の成長</p>
中2	<p>いじめについて</p> <p>「クラスに仲間をつくらだす」という観点で、いじめについて考える。お互いを尊重し、学校生活ができるクラスづくりを、生徒自身で実践する。</p> <p>世界の多様な環境問題</p> <p>海外7カ国や72カ国の人々は問題をどのようにしているのかを学び、世界と日本(ヒロシマ)の違いを認識する。</p>	<p>環境問題：環境についてプレゼンテーションを行い、現地の生活と「平和」について意見を述べ合う。双方の意見の相違や一致を認識し、どうすれば相互協力が可能かを考える。</p>	<p>クルーザーのリーダー</p> <p>クラスメイトと協力</p>	<p>自己肯定感</p>
中3	<p>多文化共生・異文化理解：在日コリアンについて</p> <p>ヘイトスピーチなど現代生身の差別の現状を学ぶ。異なる背景をもつ人々と社会の中で協力し合っていくには何が求められるかを考える。</p> <p>核兵器を継続すべきか</p> <p>建設的に「アムネスティ」を行う。生徒には機械的に賛否を割り振る。アムネスティ賛/反、生徒に自由に賛否の立場を明かす。自分の意見とその根拠を小論文にまとめる。その決定の一環として、検閲止論、日本の戦争責任、長崎の原爆について学ぶ。</p> <p>平和記念館プロジェクト</p> <p>国内外・平和問題が重要な役割を決定し、問題の解決のためのリサーチを行う。テーマとしては、カンボジア内戦や日韓問題、朝鮮半島の統一、フランスの国境を戻す、生体主権で学習し、加減をシミュレーションする。現地の若者と直接会い、お互いの抱える問題を共有し、お互いの問題の解決のために協力することはいかに感じ合ひ、実行に移す。</p>	<p>在日コリアン・高校：在日コリアンについてプレゼンテーション・ユニバーシティ：現場でヒロシマについてプレゼン、大学で平和学習</p> <p>長期研修旅行：従来の学習の中には、Jpadなど新しい方法を導入</p> <p>ミンパノア研修：JICAの現職体験。現職から指導・プレゼン</p> <p>カンボジア研修：ヒロシマを伝えることとは、内戦について学びあう</p>	<p>クルーザー：船とともに環境</p> <p>パズル・グループ・ミント in 東京：東京近郊の自然について議論</p> <p>沖縄研修旅行：沖縄の平和の生と歴史を体験する</p> <p>国際会議への派遣：生徒を派遣し、エンタープライズ大学やNIPP 青年社会連などへ派遣</p> <p>Peace Forum：研修に参加した本校生徒を中心に運営。海外からの参加者とともに平和についてプレゼン・討論する</p>	<p>チームのリーダー</p> <p>意見を戦わせ論議中に争点を理解</p>
高1		<p>プロジェクトのリーダー</p> <p>作業をまとめ、議論を数回に1回</p>	<p>クルーザーのリーダー</p> <p>意見を戦わせ論議中に争点を理解</p>	<p>クルーザーのリーダー</p>
高2	<p>沖縄の地上戦・基地問題</p> <p>沖縄の歴史と問題について決断を考へさせ、プレゼンにまとめる。自分の国や社会が抱える問題に向き合い、自分の考えのもとに決断を考へることができるようになる。</p> <p>多文化共生社会</p> <p>グローバル化が一層進展する社会の中で、バングラダシの貧困を伴った社会をつくるためには何が求められるかを考える。</p>		<p>クルーザーのリーダー</p> <p>意見を戦わせ論議中に争点を理解</p>	<p>クルーザーのリーダー</p>
高3	<p>核兵器を廃絶すべきか</p> <p>核兵器の開発、核兵器廃絶上の国、非核兵器国で核の傘の下にある国、非核地帯の国などの役割を生徒に考え、それらの国の立場についてリサーチさせる。そこで学ぶ役割を担った生徒は核問題について議論し、決断に持ち込め、議論を経て、各自の研究論文を完成させる。</p>		<p>クルーザーのリーダー</p> <p>意見を戦わせ論議中に争点を理解</p>	<p>クルーザーのリーダー</p>

<p>課題</p> <p>国内外の社会問題 を各自教材で深く 探索</p>	<p>準備</p> <p>行を準備したプレゼン ゼンキガを育成</p>
--	--